

住まいあれこれ

高齢者の住まいというと、床に段差がないとか、玄関やお風呂に手すりをつけるといった、いわゆるバリアフリー住宅を思い浮かべる。もちろんこれらは当然配慮すべきことだが、その前にもっと大切なことがあると思う。その住まいが、その人らしいものになっているか、その人にふさわしい場所になっているかということだ。今までに手がけた住宅の中から、いくつかの実例をあげてみようと思う。

〈趣味の踊りを楽しむ〉

施主の方は七十歳代の女性だが、大変に日本舞踊がお得意で、踊りを満喫できる住宅にすることがポイントだった。一人暮らしなので多くの部屋は必要ない。思い切った一階に踊りのための広い空間

を確保。また健康面にも特に配慮し、無垢の木や土といった自然素材をふんだんに使用した。

〈集いの場であり

収益性も確保

施主の方は六十歳代の女性。これからの人生をできるだけ豊かに、いきいきと暮らせるための住まいづくりを考えた。立地に恵まれていたので、収益性のあるビルが実現。ご自身の住居を最上階、一、二階はテナント、三、四階は賃貸マンションとした。

住居は段差をなくし、なおかつ子供家族や趣味の仲間がワイワイ集える空間とした。そして一番のメリットは家賃収

入。それによって老後の暮らしがゆとりあるものとなった。もちろん前提としては、事業としての安全性、収益性を十分に検討した。

〈定年後を故郷で

施主の方は東京で長らく音楽関係の仕事に従事。定年を機に故郷大分に夫婦ともども暮らすことに…。その理由の一つは九十歳の母親が、そこでずっと一人暮らしをすること。もう一つは、施主本人が、これからの人生を大分

でゆつくりと過ごしたいと考えたこと。現在建築中のこの住宅の場合、母親と施主夫妻にとつて、ともに快適な住まいであるということが必要だった。音楽、陶芸、料理、ワインなど多彩な趣味を存分に楽しむことのできる健康的のびやかな住まい。そのため



に、地元大分の木材をふんだんに用い、大空間と広いテラスのある家とした。また、母親の気持ちを考え、住み慣れた純和風の家とその庭の佇まいを残した。

このように、人それぞれ大切にしたいことは違う。既成概念にとらわれず、自分が自分らしくこれからの人生を生きていけるような住まいを考えることが一番大切なのではないだろうか。

